

伊丹の酒歌留多読本

- い ^{いたみ れきし にほんいさん} 伊丹の歴史は日本遺産 (いたみのれきしは にほんいさん)
令和2年に「伊丹諸白」と「灘の生一本」は日本遺産に認定されました。
- ろ 六甲嵐に颯爽と 蒼天翔ける日輪の (ろっこうおろしにさっそうと そうてんかけるにちりんの)
阪神タイガース応援歌の一節です。六甲山に当たって吹き降りてくる強い風が六甲嵐です。
- は 俳諧文化 文人墨客往来柿衛文庫 大胆剛健酒脱伊丹風 (はいかいぶんか ぶんじんぼっかくおうら
いかきもりぶんこ だいたんごうけんしゃだつ いたみふう)
伊丹には大胆で剛健、洒落のきいた伊丹風と言われる独自の俳諧文化が育ちました。旦那衆がホスト役
となってもてなす「サロン」であった場が、俳諧コレクションとして有名な柿衛文庫となっています。
- に 日本酒で乾杯 白雪蔵祭り (にほんしゅでかんぱい しらゆきくらまつり)
阪神大震災の復興イベントとして始まった白雪祭りですが、今では冬の恒例イベントとなっています。
- ほ 翻弄終始 制限緩和繰り返し 米の相場に四苦八苦 (ほんろうしゅうし せいげんかんわくりかえし
こめのそうばにしゅはく)
江戸幕府は酒造業に度々規制と制限緩和政策を行いました。米の相場に苦労しました。
- へ 経てもなお 千秋飲酌芙蓉霞 芳醇無比聲譽秀天涯 (へてもなお せんしゅうかんしゃくふようかす
み ほうじゅんむい せいよてんがいひいず)
酒瓶や酒樽にこうありたい願いのキャッチコピー、白雪なら千年たっても人々が喜んで酌み交わす酒
でありたい 菊正宗では芳醇はこの世界にとどろきわっているの意味。
- と とてもじゃないよ 辛くて酸っぱい 酒の味 (とてもじゃないよ からくてすっぱい さけのあじ)
昔の酒は大変辛く、とても酸っぱい味だったとか。
- ち ちよいと見てきて 軒の酒林 (ちよいとみてきて のきのさかばやし)
良い酒ができていますよのお知らせに、酒蔵の軒先につるされる丸い杉玉。
- り 律令制の階級制度で下戸上戸 (りつりょうせいのかいきゅうせいどで げこじょうご)
律令制の階級制度では飲めるお酒の量も決められていました。上戸では8瓶、下戸では2瓶。
- ぬ 塗り込め軒裏に虫籠窓 旧石橋家住宅 (ぬりこめ のきうらにむしこまど きゅういしばしけじゅう
たく) 江戸時代後期建築の商家、石橋家。虫籠のように細かい格子を付けた窓を虫籠窓といいます。
- る 類似酒焼印摘発、勝手次第 (るいじさけ やきいんてきはつ かってしだい)
偽ブランドの酒が出回り、取り締まりに焼印を押していましたが、法的には保護されていませんでした。
- を おさおさ聞すれば二千年袖鑑 (おさおさえっすれば にせんねんそでかがみ)
袖に入るほどの案内書、ガイドブックが袖鑑、二千年の出来事が記されている？
- わ 技は正直「正直鉋」 作るは十石桶 古酒から新酒へ (わざはしょうじき「しょうじきかな」 つく
るはじゅっこくおけ こしゅからしんしゅへ)
大きな桶を作る技に役立ったのが中国から伝来した正直鉋、新酒の大量生産が可能になりました。
- か 寒や北風 六甲嵐、灘の本場で 桶洗い 丹波杜氏の唄響き (かんやきたかぜ ろっこうおろし なが
のほんばで おけあらい たんぱとうじのうたひびき)
篠山藩の農民は農閑期に伊丹や灘に酒造り杜氏として出稼ぎにきていました。「桶洗い唄」などの酒造
り唄は、作業時間やリズムを合わせるのに役立っていました。
- よ 吉原川柳 七ツ梅ふり出すな袖の梅で散り (よしわらせんりゅう ななつうめふりだすな そでのう
めでちり) 「袖の梅」は吉原で売られていた酔い覚ましの薬、「七ツ梅」は大人気の伊丹下り酒、酒
の酔いを覚ます薬とをセットにした川柳です。

- た 田に感謝 一麴、二酛、三造り、酒米の王様山田錦（たにかんしゃ いちこうじ にもと さかまい おうさま やまだにしき）酒造好適米の1936年山田錦は兵庫県で誕生しました。
- れ 例のたえせぬ水のおとなふ老松丹水石白に（れいのたえせぬ みずのおとなう おいまつたんすい いしうすに）伊丹酒の仕込み水は井戸水、老松で使われた水は「老松丹水」と呼ばれています。
- そ ゴーンみやのまえ文化郷（ぞんみやのまえのぶんのさと）みやのまえ文化の郷は美術館や工芸センター、旧岡田家住宅・旧石橋家住宅、柿衛文庫を加えた文化ゾーンです。
- つ 詰口にごらず縁起を担ぐ（つめくちにごらず えんぎをかつぐ）清酒業界では濁音を避けます。「濁る」にごるは、酒が濁る、酒が腐ることを連想させるからです。
- ね 根絶やしされぬたくましさ「どぶろく」税でもこそそと（ねだやしされぬたくましさ 「どぶろく」ぜいでもこそそと）酒税は明治政府の重要な財源でした。より厳しくするために自家醸造を禁止、酒税法の縛りを強くしました。農村地区で作られていた「どぶろく」は姿を消すことになりました。が、人々は逞しく隠れて作り続けました。
- な なんと雅な 伊丹の風情は近衛家の風流（なんとみやびな いたみのふぜいは このえけのふうりゅう）伊丹の領主は公家の五摂家のひとつ近衛家でした。伊丹独自の風流が育つ背景に近衛家の影響がありました。
- ら ラムネが利くよ 二日酔い（らむねがきくよ ふつかよい）
二日酔いはアルコールを分解するために肝臓に負担がかかり低血糖になることが原因。効果があるのはブドウ糖。ラムネ菓子の90%はブドウ糖です。舐めれば二日酔いが楽になるのです。
- む むらさめじきさめにわさめ 一升瓶にて死語（むらさめ じきさめ にわさめ いっしょうびんにてしご）売主が酒を薄めて売るため、村のはずれにつく頃には覚める、じき覚め、庭を出る頃には覚めるにわさめが流行語に。ガラスの一升瓶が開発されて解決に向かいました。これから酒造りも近代化へ
- う 上島鬼貫まことの外に俳諧なし（うえしまおにつら まことのほかに はいかいなし）
伊丹郷の酒造家の三男として生まれた上島鬼貫は、伊丹風俳諧の若手俊英として活躍しました。25歳となった鬼貫は伊丹風俳諧に疑問を持ち、「まことの外に俳諧なし」の境地に行きつきます。東の芭蕉、西の鬼貫と呼ばれる俳諧人となりました。
- み 稲野神社のゑびす祭り（いなのじんじゃの えびすまつり）
平安時代後期に傀儡の地道な布教活動で全国に広まった戎信仰。伊丹の稲野神社のゑびす祭りも市民に親しまれています。
- の 軒をならべて 今のはんじゃう（のきをならべて いまのはんじょう）
井原西鶴の「津の国のかくれ里」に出てくる一節です。伊丹は酒によって多くの店が並んで繁盛している様子を記しています。
- お 大天狗金毘羅ふねふね追風に帆かけて樽廻船（おおてんぐ こんびらふねふねおいてほかけて たるかいせん）酒専用の運搬船、樽廻船は金毘羅大権現を祭る香川の金毘羅宮へ安全祈願を祈りました。金毘羅大権現は海上安全の守り神で 眷属は天狗です。
- く 下りも下ったり下り酒（くだりもくだったり くだりさけ）
天皇がおられる都は常に上、江戸へは下ると言います。江戸から運ばれる酒は「下り酒」と呼ばれ美味しい酒と重宝され大流行しました。下ってこない（上方の品）物は美味しくもない物、「くだらないもの」が良くない物「くだらない」つまらないという意味の語源になりました。
- や 山越え谷越えなへなへくたくたとなして駄送り40日（やまこえたにこえ へなへなくたくた だおくりしじゅうにち）伊丹清酒の元祖ともいわれる鴻池新六幸元は、江戸で売れると思ひ、馬の背に積んで運びました。それが大当たりし豪商として知られていくようになります。
- ま まつとしきかば12万石（まつとしきかば じゅうにまんごく）
海路で送られる伊丹酒は12万余り、江戸の人々は待ち焦がれたそうです。

- け 慶派仏師の鴻池慈眼寺、本尊木造釈迦如来像（けいはぶっしのこうのいけじがんじ ほんぞんもくぞうしゃかによらいぞう）鴻池6丁目にある鴻池慈眼寺のご本尊は木造の釈迦如来像です。慶派仏師が彫ったとされ、重要文化財となっています。
- ふ ふりみふらずみ神無月 冬の初めの酒の元旦（ふりもふらずみ かなづき ふゆのはじめのさけがんとん）後撰和歌集より「神無月 ふりみふらずの定めなき 時雨ぞ冬のはじめなりける」の歌を参考に、酒造元旦として10月1日を祝う日にかけました。酒はトリ（酉）にサンズイがついた字、酉は十二支では10番目にあたります。
- こ これはお礼で 伊丹諸白（これはおれいで いたみもろはく）
「痛み入る」と「伊丹」をかけた洒落です。麴米ともろみ両方に精白米が使われたのが伊丹諸白、よほどに嬉しい贈り物であったことが分かります。江戸の洒落本、辰巳之園に書かれています。
- え 江戸の見栄っ張り 新酒番船赤い法被の惣一番（えどのみえっぱり しんしゅばんせん あかいはっぴのそういちばん）江戸っ子の一番好きは有名。その年の新酒を積んだ樽廻船レースに大熱狂。一番乗りのは赤い法被を着て惣一番のぼりを振りながら駆けぬけたそうです。もちろん高値やメリットもありました。出航は11月頃、伊丹や灘の酒を積んだ樽廻船が西宮港から江戸に向けてスタート。
- て 天下第一たる事はいふもさら也伊丹酒（てんかだいいちたることは いうもさらなり いたみざけ）江戸後期の伊丹俳諧宗匠・梶 曲阜（かじぎょくふ）著作の『有岡古続語（ありおかこぞくご）』伊丹の見聞録ですが、その中に記されています。
- あ 在りし日の姿俣ばせ有岡城跡惣構（ありしひの すがたしのばせ ありおかじょうあと そうがまえ）織田信長の家臣であった荒木村重は侍町と町屋地区を堀と土塁で囲んだ惣構に大改装しました。後に村重は信長に反旗を翻し、城は焼き払われてしまいました。有岡城跡は国の史跡に指定されています。
- さ 酒樽卓子酒樽夜市（さかだるテーブル さかだるよいち）樽をテーブルに星空バーのイベントが毎年開催、市民の楽しみの一つとなっています。
- き 窮地脱した旗印 公家の五摂家近衛殿御家領摂州河辺郡伊丹郷（きゅうちだつしたはたじるし くげのごせつけこのえどのごかりょうせつつかわべぐんいたみごう）伊丹は公家の中でも格式が高い五摂家の近衛家の所領となりました。酒税規制の影響で廃業する蔵元が多い中、「近衛家殿御家領摂州伊丹郷」の旗印で伊丹酒に特別の庇護を与え、公家との太いパイプもあり、窮地を脱することができました。
- ゆ 由良助 剣菱持と討ち入りに（ゆらのすけ けんびしもてと うちいりに）赤穂浪士が吉良邸討ち入り前に、出陣酒として飲んだのは剣菱。歌舞伎の演目『仮名手本忠臣蔵』で大星由良助（大石内蔵助）が「酒を持って」は「剣菱を持って」だったとか。
- め 明治政府 維也納万博に参加 日本酒も出展（めいじせいふ ウィーンばんぱくにさんか にほんしゅもしゅってん）明治6年1873年にオーストラリア、ハンガリー帝国の首都ウィーンでの万博に日本も参加、日本の陶器や酒も出展されました。
- み 名字帯刀「御酒屋」ちょっと違うね 扱いが（みょうじたいとう「おんさけや」 ちよつとちがうね あつかいが）幕府の「管用酒」となった酒は「御免酒」と呼ばれました。伊丹の酒屋のうち特別に良い酒を造っていると幕府が認めた酒屋24軒に名字帯刀が許され、「御酒屋」と呼び格式の高い酒屋として扱われました。将軍の御膳酒「老松」は御免酒の中で最も格式が高いとされました。
- し 商家で兵庫最古の旧岡田家（しょうかて ひょうごさいこの きゅうおかだけ）現存する古民家で築年がはっきりしている旧岡田家は、兵庫県最古で重要文化財です。
- ゑ えびす信仰 広めた傀儡、淡路へ（えびすしんこう ひろめたくぐつ あわじへ）室町時代、人形遣いの傀儡師は西宮神社周辺に住んでいました。「えびすかき」と呼ばれる人形操りで全国をまわり恵比寿神の信仰を広めました。傀儡の始祖は百太夫で淡路に渡り、人形浄瑠璃に発展させていきました。えびす様は商売繁盛と共にお酒の神様として全国で親しまれています。
- ひ 菱廻船から樽廻船、海運王も生まれ出ず（ひしかいせんからたるかいせん かいうんおうもうまれいず）大消費地江戸に上方からたくさんの商品が海路によって運ばれました。最初は菱廻船（菱垣廻船）で

積載が満載になるまで出航せず、荷も嵐などによって損失を受けることもありました。時間もかかる為酒造業者たちは不満がありました。そこで酒樽専用の樽廻船が登場し、スピーディに荷を運び支持を集め、海運王も生まれました。

も もうあかん 稲寺屋事件の失態に 起死回生の御膳酒にて酒筆頭 (もうあかん いなでらやじけんの したいに きしかいせいのごぜんしゅにて さけひっとうがしら)

銘酒剣菱のルーツは稲寺屋にあります。抜け駆けをした「稲寺屋事件」などの失態で、急速に勢いをなくしていきます。將軍の御膳酒となり起死回生か！ とはならず3年後に姿を消してしまいます。しかし、剣菱は蔵元を変えながら、銘酒として生き続けています。阪神大震災後、灘へ移転した剣菱酒造ですが、その跡地には伊丹市立図書館ことば蔵が建ちました。

せ 西高東低御免酒ごめん (せいこうとうてい ごめんしゅごめん)

下り酒の御免酒に対抗し、幕府御免関東上酒のプロジェクトに着手。お膝元で良い酒を造ろうとした試みでしたが、結果は芳しくありませんでした。

す 好きも好きもの甘辛合戦 (すきもすきもの あまからがっせん)

酒の一大消費地江戸では、酒好きを辛口嗜好、酒を好む者を辛党、酒が飲めない者を甘党と呼んでいました。

ん ン回し 灰が転じて福となす 高運山中新右衛門幸元 (んまわし はいがてんじてふくとなす こう うん やまなかしんえもんゆきもと)

清酒の父であり鴻池家の始祖である山中新右衛門幸元。清酒ができたいきさつは、叱られた腹いせに、酒の中に灰を放り込んだ使用人の仕業であったとか。灰が清酒を生んだのです。幸元の類稀なる才能もありましたが、時代も味も味方した運回し、高運な御仁でした。